



ぶんこだより

子どもたちと、もっともっと絵本を楽しんでもらいたいから…

2 FEB
2026

「赤羽 末吉」

9月になってから（2025年の）、ずっと電動糸のこの前に座って、12月まで「お馬さん」の組み木を切っていました。

東京都三宅島の子どもたち 205人と、福島県飯舘村の子どもたち 107人に届ける、2026年の「干支」のお馬さんの組み木です。合計 312 の組み木を切り終えて、12月10日頃に送り届けることができました。



新年になって、1月4日（日）から始まった、子どもたちの教会学校は、カルタ大会でした。2つのグループに分かれ、グループで枚数を競うカルタ大会は、とにかく盛り上がります。使うカルタは、一回戦は、今年は拡大した「ばばばあちゃん」、2回戦は安野光雅の切り絵の「江戸いろは」です。江戸いろはの伝統を守った切り絵のカルタは、言葉遣いも古く、自由な切り絵も解りにくかったりするのですが、小学校1年生から中学生まで、団体戦を一緒に競って盛り上がります。

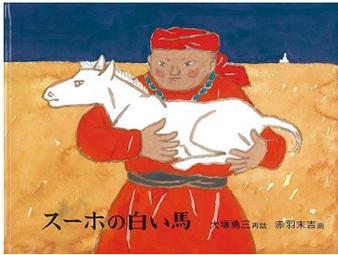


勝ち負けはあって、大きな風呂敷包みと、小さな風呂敷包みを、勝ったチームから選べますが、もちろん中味は??です。

そして、カルタ大会の最後は、子どもたちに届けられた、年賀状の抽選会です。

抽選会の景品は、もちろんお馬さんで、抽選に当たった 12 人の子どもたちのプレゼ

ントは、琉球松で作ったお馬さんのストラップでした。



そうして、お馬さんで始まった、教会学校の、礼拝で読んだのが、「スーホの白い馬」(モンゴル民話)(再話：大塚勇三、画：赤羽末吉／福音館書店、1967年)でした。

赤羽末吉の「スーホの白い馬」は、「横長」の「左開き」の絵本です。

「表紙」を開くと全体に描かれているのは、広い草原(モンゴル)と、力強く白い馬を抱く少年(スーホ)です。物語では、成長した白い馬は、「駆けて駆けて」殺されてしまいますが、しっかり見つめる、それぞれの目は、2人の強い意思を感じさせられます。強気とか、そういうことではなく、モンゴルの草原で生きる、生きものとしての強い意思です。



言ってみれば、「2人は(馬も含め2人というのは、ちょっと変ですが)生きものであり、自然の一部である」ことを、そして、それはこの物語全体を通しての、作者たちであり、出版社(福音館書店)の意思でもあることを感じさせられます。(ちなみにこれらのことも以下に述べるこの絵本についての言説も、一人の読者の「感想」の域を出るものではないことを、お断りしておきます)。

表紙を開いた最初のページに描かれているのは、絵本の表題と2弦の楽器です。何一つそのことの説明はありませんが、「スーホの白い馬」は、この2弦の楽器の物語、物語の主人公は、この2弦の楽器でもあるのです。

次のページを開くと、画面いっぱい描かれているのは、大きな虹ともう一つの虹の影です。それが、見開き60センチの大きな草原の中で描かれ、しかも、いかに大きいかは、草原の中のパオと小さな羊の群れで、「一目瞭然」で解るようになっていきます。

そして、この物語が、2弦の楽器「馬頭琴」の物語であることも、端的な言葉で語ら

れています。「中国の北の方、モンゴルには、ひろい草原がひろがり、そこに住む人たちは、むかしから、ひつじや、牛や、馬などをかっていた。このモンゴルには、馬頭琴という、がっきがあります。このがっきの一番上が、馬の頭のかたちをしているので、ばとうきんというのです」。

こうして始まる「ひろい草原」の物語ですから、見開き 60 センチの画面は、どうしても必要なのです。赤羽末吉の子どもの絵本は、そのところを、どんな意味でも値引きしてはいけません。絵本の色彩は、描かれた動物や人間全体がいきなり黒くなったりしますが、スーホの抱きかかえる馬だけは白です。しかし、次のページは、「スーホが、心をこめてせわしたおかげで、子馬はりっぱにそだちました」のですから、温かい色彩で、子馬を抱くスーホが描かれています。たぶん、作者の赤羽末吉自身が、スーホになって、白い馬を「心をこめてせわした」、その結果、こんな絵本の絵になったに違いありません。

ページを開くごとに、そのスーホの白い馬の、生き生きとしたその姿、物語が描かれ、絵本の絵が、それを語り伝えます。（「怒られる」かも知れませんが、子どもでも解るように…。いいえ、子どもの心と共生・共感できる作者、赤羽末吉が、そんな絵・絵本の作者なのです）。

そして、どのページを開いても、そこには必ず、「モンゴル」の「ひろい草原」と、そこで繰り返される「2人は生きものであり、自然の一部である」が描かれます。しかしそこでは平凡であっていいはずの、生きものとして、何よりの願いが同じ人間の理不尽によって、踏みにじられるということも、避けることができません。

そして、悲しい「馬頭琴」の秘密を語って、この物語は閉じられます。

ただ、馬頭琴の言い伝えが、こんな物語の、ページを開く毎の、絵本の物語になって、子どもたちの世界に登場することになったのは、決して偶然ではなく、再話した大塚勇三と、絵を描いた赤羽末吉の、子どもの絵本に、自分たちの人生そのものを投げかける、生き方が反映しているに違いありません。

子どもたちが、こんな絵本、「スーホの白い馬」のような絵本に出会う時、物語という宝物が、ずっと心に残り続けるに違いありません。

「お馬さん」の年の、最初の絵本になった「スーホの白い馬」の、赤羽末吉の描く、中国とその隣人である少数民族たちの絵本を、2月のぶんこだよりで紹介することになりました。





絵本とともに



～絵本とともに、子どもと歩む日々～



1月の「まち食堂」では、「落語絵本 じゅげむ」（著：川畑 誠／クレヨンハウス、1998年）を読ませていただきました。「今日は、『じゅげむ』を読みます。」と言ったとたん、「おお！」っと、ちょっとした歓声が。このお話をご存じの方も多いようで、読んでいる途中、一緒に「じゅげむじゅげむ、ごこうのすりきれ…」と唱えて下さる方もいて、とっても嬉しかったです！練習した甲斐がありました。「川畑 誠落語絵本シリーズ」調べてみたら、なんと、15冊もありました。知らない話もあるので、ぜひ読んでみたいです。

今月号では、赤羽末吉が描いた2冊の「中国の民話」をご紹介します。

「王さまと九人のきょうだい 中国の民話」

（訳：君島久子、画：赤羽末吉／岩波書店、1969年）



この絵本は、本当におもしろくて大好きで、我が家では何度読んだか分からないくらいです。久しぶりにこの絵本を借りてきて、ぶんこだよりを書くために何の気なしに机の上に置いておいたら...下の子は「あっ、久しぶり！読んで読んで！」と、読んでコール。上の子は「この本覚えてる...」と、静かに読み始めました。絵本からオーラでも出ているのかと思ったくらい、すーっと子どもたちが絵本に引き寄せられていったのでした。

中国イ族の痛快な昔話です。子どもがほしい、と思っている年寄りの夫婦のもとに、神から授かった九人のあかんぼうがやってきます。「ちからもち」「くいしんぼう」「はらいっぱい」「ぶってくれ」「ながすね」「さむがりや」「あつがりや」「切ってくれ」「みずくくり」と、何ともユニークな名前をもつこの九人の兄弟が、それぞれの得意なことを活かして、悪い王さまを懲らしめるお話です。

例えば、「ぶってくれ」が王さまにがんじがらめにされ、めっちゃめっちゃにこん棒の雨を受けた時に言った言葉は「ああ、いいきもちだ！もっと、ぶってくれ！かゆいところを、かいてもらって、こんな、うれしいことはない。」っと、こんな具合です。ぜひ、他の八人の兄弟たちはどんな活躍をしたのか、絵本を読んでみて下さいね。

「あかりの花 中国苗族民話」

(採話：肖甘牛、再話：君島久子、画：赤羽末吉／福音館書店、1985年)



働き者のトーリンという若者が流した豆のような汗が岩のくぼみに落ちると、真っ白なユリの花が咲きました。ある日、踏み倒されていたユリの花をかわいそうに思ったトーリンは、うちへ持ち帰ることにしました。すると、ユリの花は、毎日美しい歌声を聞かせてくれました…。このような幻想的な場面が数多く登場するお話です。

印象的だったのは、ユリの花の化身である娘が残した、刺繍された布を、トーリンが見つかる場面です。この布には、トーリンと娘が楽しげに畑で取り入れをしているところと、二人が明かりの下で睦まじく夜なべをしているところが刺繍されていたのです。「つるようぼう」のように、最後に娘はどこかへ行ってしまおうのではないかと、途中、ドキドキしながら読み進めていたのですが、この刺繍がトーリンを我に返してくれたようです。

中国少数民族、苗族の民話を絵本化したものです。この絵本の最後には、「この絵本は、1967年『母の友』誌上に発表された『あかりの花』（君島久子：再話、赤羽末吉：画）をもとに、君島・赤羽両氏による中国貴州省苗族地区取材をへて作られました。」とあります。トーリンと娘の着る物や、娘の織り成す刺繍の柄、市の様子、人々の様子等…、そしてなにより、この民話をどう解釈して絵本にするのかを、現地での取材を通して考えられたのではと思います。大切に語り継いでいきたい1冊です。

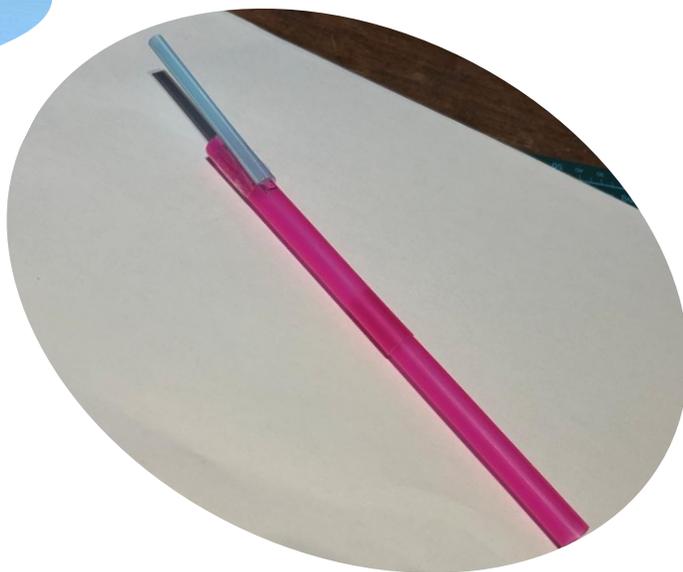


十五夜の晩になりました。
トーリンは、あかりの豆で、首かごをあんていました。
すると、とつぜん、あかりの灯心が大きくゆらめき、
ぱっと白い花になってひらいたのです。
そのあかりの花の中から、美しいむすめがあらわれました。
ふしぎなことに、ユリの花はいつのまにか消えていました。

今月のつくるて!あそぼう!

ストロー笛をつくろう

いろいろな長さに切ったら、
いろいろな音にかわる
たのしいストロー笛を
つくってみよう



【材料】

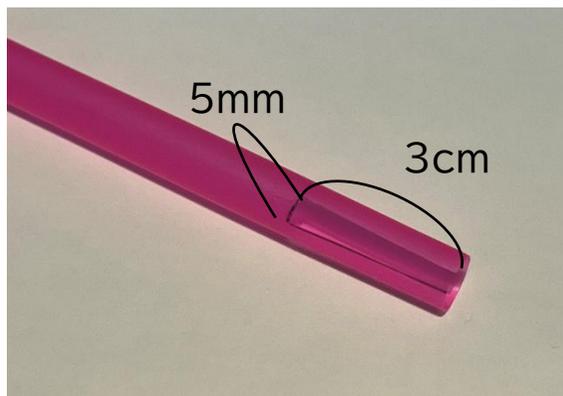
タピオカのストロー 1本
ふつうのストロー 1本
セロハンテープ
マジックペン
はさみ

「ものづくりハンドブック8」

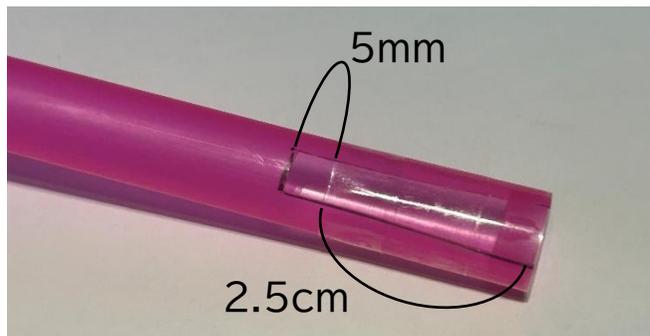
(著:「たのしい授業」編集委員会/仮説社、2014年)より

【作り方】

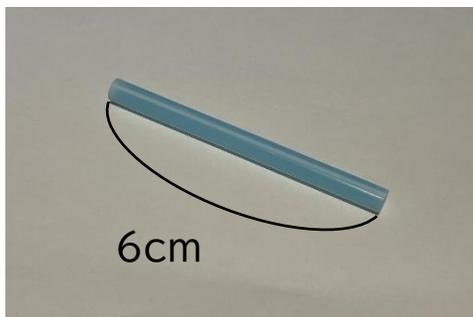
- ① タピオカのストローの端っこを、長さ 3cm、太さ 5mm の線を、マジックペンで書いて、はさみで切りとります。*ふつうのストローと同じぐらいの太さだよ。



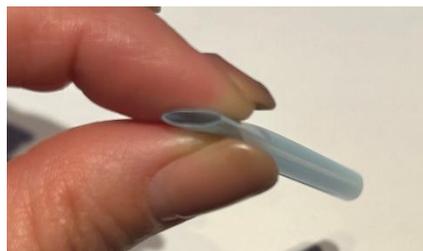
- ② 上の方を、5mm 残して、2.5cm をセロハンテープでふさぎます。
*ぐるり 1 周、セロハンテープでまいてね。



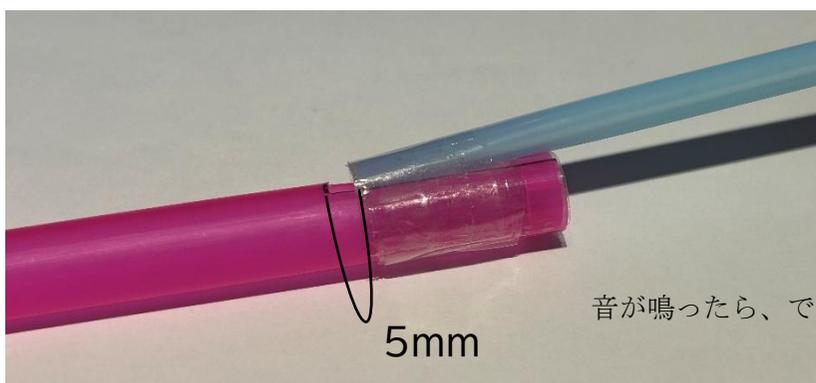
- ③ ふつうのストローを、6cm に切ります。



- ④ 片方のみ、指でつぶして平たくしよう。



- ⑤ つぶしたふつうのストローの平らな方を、タピオカのストローの開いた 5mm の部分に当てて、音が鳴るところを探してみよう。
テープのギリギリのところ、平らな部分を合わせてみると、音がしやすい。
合わせる角度も、色々ためしてみてね。
場所が決まったら、セロハンテープで止めるよ。



音が鳴ったら、できあがり！

今月のわらべうた

♪ひやふや



ひやふやのやまみちをとおってあるくははなこさん
やまのどてはくずれたあかおにさんびきにげだした
はやくにげろやはなこさん

♪おすわりやす



おすわりやすいすどっせあんまりのったらこけまっせ
どこでもいからすわりましょすわった

♪なかなかほい



なかなかほい そとそとほい なかそと そとなか なかなかほい
そとそとほい なかなかほい そとなか なかそと そとそとほい

♪向こうのお山（讃岐のまりつきった）

向こうのお山に 火が見える

お月か 星か ほうたるか

お提灯ちようちんとぼして いてみれば

あれは大きなお家の婚礼じゃ 婚礼じゃ

うちのとなりの黒猫が

お白粉つけて、紅つけて

人に見られて ちよいとかくす

お馬乗りかえ

いっちょこまたほい

梅にうぐいす ほーほけきよ

あやめに 水仙 かきつばた



「おはなしのろうそく11」（東京子ども図書館編）より

こうどうぶんこの児童文学（教会学校文庫）

～みんなにたくさんの本を楽しんでもらいたいから～

「おばあにゃん」

（作：ななもり さちこ、画：加藤休ミ／こぐま社、2026年）



こぐま社の新刊絵本「おばあにゃん」の帯を描いているのは、坂本美雨です。

「おばあにゃん、あなたは大切なものをぜんぶ、もっているんだね。」

で、「大切なもの」ってなんだろう。ねこに限らずおばあにゃん、おばあちゃんに限らず「心を許せる(許してもらえる)仲間」「好奇心、あるいは勇氣」「挑戦する心」「遊び心」「生きてきた

長さの分の余裕」などなど…。

そして、何よりの「おばあにゃん、あなたは大切なものをぜんぶもっているんだね。」のすべてが、この絵本、また絵本の絵の「おばあにゃん」に表現されていて、伝わってくるように思います。

それは、絵本の物語にぴったりの目や表情、例えば、猫はみんな「にゃ～ん」ってなくけど、おばあにゃんは、「げお～ん、って鳴く」。おばあにゃんの姿、そして表情・目は、誰が見ても「げお～ん」なのです。そして離れておばあにゃんを見ている3匹の猫たちは「納得している」感じではあるのです。

絵本と言うものは、全体が物語ではあるのですが、だからといってそれを読み聞かせるときの「読者」である子どもたちは、それが読み聞かせであるからこそ、何よりも凝視しているのは、絵である事は間違いありません。

「おばあにゃん」の物語の1場面1場面に登場するおばあにゃんは、そんな子どもたちに届くというか、おばあにゃんのファンになる違いありません。

そして、「おばあにゃん」では登場する子どもとお母さん、3匹の猫たちも、ページごとにその「脇役」たちも、その役割を果たしていて、見事です。

以上、こぐま社の新刊、「おばあにゃん」のファンになった一読者の感想です。（もちろん、ファンになった一読者の個人的な感想に過ぎないのですが）。

「おばあにゃん」をお勧めします。

こうどうぶんこ によろこそ

「こうどうぶんこ」は、およそ 50 年前、石井桃子の「子どもの図書館」（著：石井桃子／岩波書店、1965 年）に促されるように、教会礼拝堂の隅っこに 2 本の本棚に絵本を並べて始めました。

始めてみて、何よりも驚いたのは、読み聞かせする大人と絵本に、いわば「我を忘れて」向かってくることでした。子どもは、絵本・本が大好きなのです。

「こうどうぶんこ」は、「絵本・本好き」の子どもたちの力で続いてきました。

「こうどうぶんこ」によろこそ！

「こうどうぶんこ」は、集まってくる子どもたちの絵本と児童文学の「お部屋」です。



1、会員になってください

「こうどうぶんこ」の会員になってください。登録だけで、入会金・会費は不要です。2025 年毎週水曜日（不定期で、お休みの時もあります）。

借りるのも、返すのも、午後 3 時～4 時 45 分まで。

2、ぶんこの部屋

「こうどうぶんこ」は、絵本の貸し出し（読み聞かせ）、朗読、わらべうた（マザーグース）、なぞなぞなど、言葉であそぶ時間です。

3、1 度に借りられる冊数

1 人につき 5 冊まで。

4、貸出期間

2 週間

5、利用登録

本を借りられる方は、お名前、住所、連絡先などの登録をしてください。

6、お問合せ

〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

西宮公同幼稚園内 こうどうぶんこ

TEL : 0798-67-4691

FAX : 0798-63-4044

MAIL : koudou@gamma.ocn.ne.jp





こうどうぶんこ

日時：毎週水曜日 15時～16時45分

場所：ぶんこの部屋（西宮公会教会付属 西宮公会幼稚園）

March 3 2026

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20 <small>あすの日</small>	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

April 4 2026

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29 <small>恒例の日</small>	30		

編集後記

私たちが編集・発行しています。ご意見や感想、お聞きになりたいことがありましたらお声かけください。

菅澤・濱・田場・金澤